慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「学者語源」をめぐって
Sub Title	Sur l'étymologie savante
Author	川口, 順二(Kawaguchi, Junji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2013
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.104, (2013. 6) ,p.143(202)- 160(185)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2012年度慶應義塾大学藝文学会シンポジウム : ヨーロッパ文学の深層 : 古代・ 中世からの呼びかけ
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01040001-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2012年度慶應義塾大学藝文学会シンポジウム
ヨーロッパ文学の深層 —— 古代・中世からの呼びかけ

「学者語源」をめぐって[1]

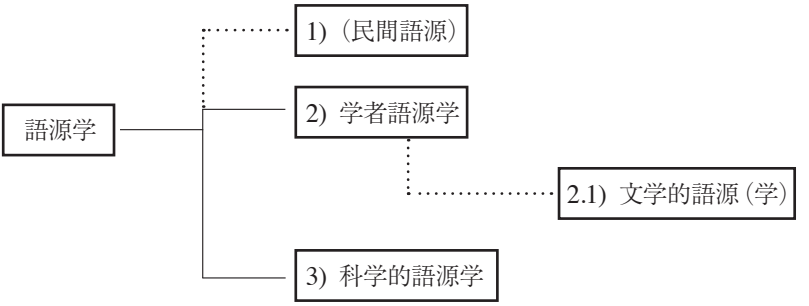
川口　順二

0. 初めに

語源学は目的, 手段, 理論的枠組みなどによって次の3つのタイプに分けられる．1つは「民間語源」Volksetymologie と呼ばれるもので, 川口 (2012) ではこれが歴史的に語源を探るものではないことを確認した．次に「科学的語源」scientific etymology とは19世紀に歴史言語学が展開するに伴い方法論が確立された科学分野であり，現在語源学者たちが実践する語源学である．最後に「学者語源」learned etymology と呼ぶものは，科学的語源学の確立以前，歴史言語学的方法論に則ることのない語源探求であり，ヨーロッパの伝統の中では特に古代から中世にかけて特徴的な，文献的知識を前提とする学問分野であり，ストア学派の言語論を下敷きにして『ラテン語について』De lingua latina を著したワッロ Varro (BC116-BC21) や，その600年ほど後に出て古代の知見をキリスト教世界に伝達する役割を果たす『語源』Etymologiae の著者であるセヴィリアのイスィドールス Isidorus Hispalensis (550~560-613) などの名前が特記される．

他方「文学的語源」という分野を「学者語源」の下位分野として立てることが考えられる．これについては第3節で述べることになる．

これらの語源へのアプローチは次のように図示できるだろう．



本稿では図中の2) として挙げた学者語源学全体の流れを概観し，またこれに対して提出された疑問にも目を配る．なお1) の民間語源は歴史的配慮を欠いた考察に基づくものであり体系性の欠如から「語源学」という名称を与えられるべきではないと考えるが，2) では歴史的考察や体系性の観点から見て状況が大きく異なる．後述するように，科学的語源論との接点が見出されるのである．ただし2.1) の「文学的語源」は学者語源の下位分類であるとは言え民間語源と類似する点もあるので中間的存在である．なお3) の科学的語源学の立場からは2) に対して異論を提出することが可能だが，研究史という視座を重要視する本稿ではそのような配慮は不要と考える．ただし語源論としての学者語源学を科学的語源学と対比することには意味があると考えるので本文中で論じることにする．

1. 学者語源学

ワッロの『ラテン語について』は全25巻のうち残存するのは第5巻～第10巻の5巻のみであるが，古代における語源論の最も重要な作品の一つと言えるだろう．ここではいくつかの例を取り上げて，ワッロの語源論の方法を見ておきたい．[2]

まず直接に観察できるラテン語の語Bの語源となるべき語Aが同定されると，A＞B（語 A が語 B に変化する）という形式が得られる．A が語源 etymology で B が語源について探求される語 explicandum である．語 A はラテン語ではないケースもあり，ギリシャ語起源のものが多い．ラテン語

の場合，語 A から語 B への変化が示される．

（1）「語る」narrare は語ることで相手が「知らされた」narus 状態になることから来る．[3]

ここでは語 A (narus) が語 B (narrare) の語源であることが指摘されているので，「知らされた」＞「語る」と表記できよう．[4] 他方より複雑なモデルが次の例に見られる．

（2）「地球，土地，地面」terra [E. earth] はアエリウスが指摘した通りそれが「踏まれる」teritur ことに由来する．そこで『占いの書』には r が 1 つだけで tera と書いてある．[5]

ここではまず語 A (teritur) が語 B (terra) の語源として提出されているが，次の段階で語 A と語 B との間に語 C (tera) を想定し，それを介在させることで語 A から語 C が出て，この語 C が語 B となったという変化を考える．この例での A＞C＞B という変化では語 C が古書に現れていると記されているが，語 C に文献的裏付けがないケースもある．[6] 19 世紀以降の歴史言語学の手法を用いるすべがなかったわけだが，ワッロの語源説の厳密な構築法が見て取れるのである．

ここでいくつかの問題が提起されよう．（A）科学的語源学に対して学者語源学の差異的特徴は何か？（B）学者語源学の目的は何か？

まず（A）だが，A＞B より複雑な A＞C＞B という図式で考えると，これは科学的語源学にも学者語源学にも共通する図式と考えることができる．ただし A については学者語源学では直接観察が可能な，語源学者の身近にある語が選ばれることが多いが，科学的語源学ではこの A も再構成された，ある意味想像上の存在であり得るという相違がある．[7] A がこのように存在の具体的証拠を欠く場合には，B または C が A の存在を保証していることが不可欠になる．任意の A を選んで任意の C から直接に観察され

る B を引き出すような語源説は明らかに説得力を欠くからである．つまり explicandum としての B の存在は観察可能だが，その説明に用いられる A の存在については科学的語源学のように厳密な再構築法によって保証されているか，学者語源学のように直接観察可能な語なので保証されるのか，というステータスの相違が目を引くのである．

次に (B) の目的について考えよう．科学的語源学はあくまで歴史的考察を主とするものであり，自身の活動そのものが科学活動という全体の中に組み入れられている範囲で許容される．つまり自足的活動として実践されるものであって，語源学を通して他の何らかの目的に供する必要はない．例えば言語変化に何らかの規則性があるとしよう．語源学はその解明に役立つことが考えられるが，しかしその目的のために語源説を作り出すことはできない．語源説が結果として通時的言語変化の規則性を明らかにすることはあっても，これを目的として語源説を構築することはできないのである．科学的語源学は自分以外の目的を想定していくことが困難であると言えよう．

当然このような比較的リジッドな，ある意味で構造言語学のあまりに厳格な枠組みに語源学を，たとえそれが科学的なものであれ閉じ込めてしまうことに躊躇することは考えられよう．実際言語変化が社会的与件に大きく影響を受けつつ実現していく図式は学界に受け入れられつつあると言える．例を1つ挙げるならば, 人名や地名などの固有名詞は指示対象の指示のみに用いられるので「意味」を持たないとされてきたが，社会言語学的観点からの観察可能な「意味変化」の追及はある意味で「語源のための語源」という立場から大きく外れたものになっている.[8] しかしながらこのような目的論的アプローチは現時点ではあくまてテンタティヴなものであり，目的論を先行させることには慎重さが要求されることは言うまでもない.

それに対し学者語源学はむしろ目的が先行するように感じられる．語源の同定は語の真の意味を知るために有用であるという考え方に同意する者が多かったと思われる古代・中世においては,「真の意味」を哲学的，神学（神話）的，詩的，教育的などさまざまな目的に沿って解釈することが

可能であったと思われる.

たとえばイスィドールスの『語源』から例を一つだけ取れば,「羊」ovis について次のように記述されている.

> 羊 ovis は柔らかい毛を持つもので, 体を守る手段を持たないおとなしい性格のものである. この語は「生贄」oblatio から来たもので, というのも昔は牛ではなく羊を生贄として殺したからである[9]

ここで考えるべきことは,「羊」についてこれが「生贄」と言う語から来たという語源関係, または昔ウシではなくてヒツジが生贄に用いられたという歴史的事実から,「羊」という語についてどのような知見が得られるのかという問題であろう.

この問いかけに対していくつかの答が考えられる. まず「生贄」という語を知っているときに「羊」という語が音声の類似によって覚えやすくなるという教育的な利点が挙げられよう.

次に語源の知識が「真の意味」にアプローチしやすくなるかという問題に触れるならば, 歴史的知識が語の指示対象の理解を深めることに異論はないが, 語の意味がよりよく知られるという考え方には困難が伴うように思われる. イスィドールスは『語源』において次のように述べた.

> 語の語源を知ることはしばしば語の理解 interpretatio において不可欠である. というのも名前がどこから来たのかを知ることでより速く citius 語の「力」vis を知ることが可能になるからである.[10]

ここで語の「力」vis を単に語の意味として解釈することはできない.「羊」の意味の理解にはおそらくは歴史的知識によるよりも現実のヒツジを知ることの方が有効に思えるからである. つまり歴史的知識は, むしろ「羊」という語そのものに関わる何らかの可能性を示唆しているとしか読めないのではないだろうか.

イスィドールスのみならず古代一般に認められる語源の知識が「真の意味」を知るために有効であるという考えは, 歴史的な意味合いで解釈することが可能である．すなわち，語とは命名者が各事物に与えた名称であり,[11] その命名は事物に合致した名称を用いたものであって，時代を遡るほど初めの名称に近づくことができ，そこから名称が示す物事の真の性質に接近できるという考え方である．イスィドールスは先に述べたとおり古代の知見を中世に伝達するという作業を行ったわけだが，ここに伝わったものとは何なのであろうか？歴史的・文化的な出来事や知識を伝えることならば「羊」についての言及は確かに役を果たしていると言えよう．しかし「真の意味」については理解が困難である.

イスィドールスの語源説は様々なソースを持ち，その同定がイスィドール研究の基本となっているわけだが，しかし根源的な問題提起を避けて通ることはできない.

ここでは「真の意味」というものが，さまざまなディスコースへの挿入可能なマトリックスとして機能する，語の使用可能性であるという考え方を示唆したい．語の内在的で閉じられた，神秘的な「意味」を求めるのではなく，人と世の中に開かれたディスコースの単位としての語の使用可能性と捉えることは，ウィトゲンシュタイン的な発想とつながるところがあるのではないだろうか.

次節ではここに述べたワッロをも含むストア学派的語源論に対して提出された疑問点を確認していく.

2. 学者語源への疑問

ワッロが LL を捧げたキケロ―は『神性について』De natura deorum (BC 45) においてストア学派のバルブス Balbus と，エピクロス学派を代弁するウェッレイウス Velleius, そして懐疑主義的立場をとるコッタ Cotta との間の論争を展開する対話編である．この中でコッタはストア学派の寓話による語源説を批判して次のように言う：

なぜこのような作り話の説明と名前の解説があなた方を喜ばせるのか？カエルス Caelus は子供に去勢され，サトゥルヌスも同じく子供によって鎖に繋がれたとかいう類の話[12]を作った人たちをあなた方はおかしいと思わせるどころか智慧にあふれる人たちだと思わせようとしている．名前の説明のためになんと哀れな作業をしているのだろう！サトゥルヌス Saturnus は「（多くの）年」anni で「満ちる」satis こと[13] から来るとか，マウォルス Mavorus（＝マルス Mars）は「多くのもの」magnus を「ひっくり返す」vertere から，ミネルヴァ Minerva は「減らす」minuare または「脅かす」minor から，ウェヌス Venus はすべてのものに「来る」venire から，ケレス Ceres は「実らせる」gerere からなどというふうに．なんと危なっかしい技だろう！というのも沢山の言葉についてあなた方は困ってしまうだろうから．ウェーヨウィス Vejovis はどうするのだろうか，ウゥルカーヌス Volcanus は？しかしながらあなたはネプチューン Neptunus が泳ぐ natare ことから名づけられたと考えているのだから，文字 1 つ用いてどこから来たのかを説明できない名前などないだろう（この点に関してはあなたの方がネプチューン以上に泳いでいる（ふらついている）natare ように見えるが）．[14]

ストア学派の語源説の痕跡が見えるが，このキケロによる批判はその後次のような形で継承されていく．すなわち『弁証術』De dialectica[15] では第 6 節で語源について議論が展開されているが，内容そのものには特に新しさがないとは言え分かりやすくまとめられているので，以下この紹介を通して古代末期での語源に関する議論を見ておくことにしたい．

この書の同定されていない著者は語源探求が興味深いものであるとはするもののその有効性に疑問を投げかける．[16] 以下で簡単に論点を要約しておこう．語 B の語源となる語を A として話を進める（これを A > B（「語 A から語 B が派生する」）と記す）．

語源の探索は終りのないもので, 完成することが不可能であるとする. 語源の同定は各自がそれぞれ判断するものであり, コンセンサスを得るのが困難であることがその理由である. 例えば verbum「語（言葉）」という語を B とすると, ここから遡って語 A を求めることになる. ある人はこれが「（言葉が）耳を打つ（耳に響かせる）ようだ」((verba) aurem quasi verberent) からだとする.「「耳」ではなくて「空気」を打つのだ」という人もいるだろうが, いずれにしろ「打つ」verberare から「言葉」verbum を派生させることに違いはない. しかし3人目の人が, 話すということは真実を話すことであり,「真実」verum が「言葉」verbum 語源であると異論を唱える. ところが4人目の人は verbum の第1音節 ver- は確かに verum にも見出せるが, 第2音節 -bum は説明されないことに注目して, -bum は音を表す要素だという.[17] Verbun が「打つ」から来たのか,「真実」からなのか, それとも「「真実」+「音を出す」」から来たのかを決めてもらうか, それとも我々はその意味を理解できるのだからどこから来たのかは気にしないことにするべきなのだろうか.

機知に富んだこの議論展開は現代の語源学者にも納得のいくものではないだろうか. 著者はこの後語 A が語 B に至る過程を列挙する. すべての語について語源の同定が可能だと考えるストア派学者たちは語源の同定にまず第一に擬声・擬態語を求める.

ストア派の学者たちは語源を確定できない言葉はないと主張する. A に対応する B を見出せないと言うと,「B の指す物事がそれを指す言葉 A と一致するような音を持つものを求めなければならない」と答える. 例えば「（金属の）カンカンいう音」(aeris) tinnitus,「（馬の）ヒンヒンいう声」(equorum) hinnitus,「（羊の）メーメーいう鳴き声」(ovium) balatus のような擬音語である.

第二に挙げられるのがより抽象的なサウンド・シンボリズムである.

> 音を出さないものについては，感覚的な一致を求めることになる．例えば「柔らかい」lenis とか「粗い」asper 感覚を与えるものについては同様な音を持つ言葉を探るべきである.「柔らかい」lenis という語そのものがすでに柔らかく響く語ではないか．また「粗さ」asperitas という語はその語の発音そのものが粗いのである.「欲望・楽しみ」voluptas という語は柔らかく耳に響くし,「十字架, 絞首台」crux は粗く響く.

三つ目に言及されるのが「隣接」vicinitas による意味の拡張である.

> 「小さい」parvus と言えるある物を，たとえそれが小さくされたことがなく，これから大きくなることがあろうとも「縮小された，微小な」minutus[18] と言うことができる.
> また piscina は「魚」piscis に由来し，元来は「養魚池」の意味だが，拡張により魚のいない，単に水の溜めてある「浴槽」をも意味するようになった.

次に「対義」antiphrasis による命名がある.

> 「聖なる森」lucus は「光らない（輝かない)」minime luceat から,「戦争」bellum は「美しく」bella ないことから, そして「条約」foedus は「醜くないもの」res foeda から，それぞれ名前を得る.

上に見た「隣接関係」vicinitas とはいわゆるメトニミであり，様々なサブタイプが列挙される.

「効果」によるものでは「豚の醜さ」foeditas porci から効果として得られる「（同盟）条約」foedus が[19]派生し，「結果」によるものとしては例えば「飲むこと」potatio からそれを結果として持つ「井戸」puteus が，「包摂」では「周，周囲」orbis からそれが含みこむ「都市」urbis が，[20] また逆に「被包摂」では「大麦」hordeum からそれを入れる「穀倉」horreum が（これはまた拡張用法により「小麦」triticum など大麦以外の穀物を貯蔵する倉にも用いられる），「部分により全体」をしめすものは「（刃の）先端」mucro がそれを部分として持つ「刀」gladium を意味し，逆に「全体により部分」を示すものには「頭髪」capitis pilus から 1 本の「毛髪」capillus という語が得られる．

以上を纏めると語源とは（1）語の音声とその語の指すモノの類似，（2）モノ自体の類似，（3）隣接，（4）対義，という 4 つの関係のいずれかに帰着することになるとされる．

ストア学派の語源論はすべての語の語源を解明することが可能だと考えていたわけだが，De dialectica の著者は語源からの多様な派生形態を示すことで言葉のサウンドシンボリズムの追及がいかに困難であることを示唆した．しかしこれに止まることなく，サウンドシンボリズムそのものの弱点を突く議論が展開されるので，少し長くなるがその部分を訳出しておこう．

「巧妙な」vafer，「帆」velum，「葡萄酒」vinum，「犂の刃」vomis，「傷」vulnus などの語の語頭に現れるアルファベットの v が示す音声が重厚で力強い音を示すことは万人の認めるところで，そのために耳への負担を減らす目的でこの音が省略されることは無数にある（「君が愛した」amavisti が amasti に単純化するなど）．そこで「力」vis という時その意味はこの音にそぐうものだと言える．ここから結果としての隣接関係を持つ，つまり「力強い，強制的な」」violens ものなので，ここから「（つなぐ）紐，鎖」vinculum が得られ，またつなぐのに用い

られる「(細工などに用いる）柳（の枝)」vimen が出る．また「ブドウの幹」vitis もその蔦がからみついて己を支える杭を捕えるために得られた名称である．

テレンティウスは類似によって背中の曲がった老人を「(体の）しなびた」vietus と呼んでいる．同様にして曲がりくねっている，通行人に踏まれる土地の一部分をさす「道」via という語が出る．しかし「道」via が足の力 vis で踏みつぶされることからの命名だと考えると語源説は隣接関係に戻る．「ブドウの幹」vitis と「柳」vimen との類似の関係で，つまり「曲がり」flexus からの派生と考えて見よう．

誰かに「なぜ「道」via と呼ばれるのか？」と尋ねられれば, 私は「「曲がり」flexus から，というのもそれは曲げられて flexus カーブして incurvus しているモノを昔は「しなびた，曲がった」vietus と呼んだからで，それゆえに箍（たが）が周りにつけられた車輪の木の部分もこの名で呼ばれる」と答えよう．続いて「なぜ「曲がり」flexus があるものは「曲がった」vietus と呼ばれるのか」と問われれば,「「ブドウの幹」vitis との類似からだ」と言おう．これについても理由を問われれば,「それはつかんだものを「繋ぎ止める」vincire からだ」と説明する．この「繋ぎ止める」vincire について再び質問が出れば,「それは「力」vis からだ」と答える．そこで「なぜ「力」は vis と呼ばれるのか」と聞かれるだろう．その理由は「がっしりとして力を感じさせる音によってこの語はその意味するモノと調和しているから」ということだ．ここで質問は尽きる．語源が音の変化によっていかに多様であるかを探ることは，それが時間を要するもので既に述べたことよりも重要ではないために無意味なのである．

3. 文学的語源

ローマ帝国を創始するアウグストゥス帝 Augustus (BC63-AD14) の時代のローマ文学はウェルギリウス Vergilius，オウィディウス Ovidius，ホラティウス Horatius，プロペルティウス Propertius，ティブッルス Tibullus な

どが出て黄金時代を築く．彼らはしばしば同時代のワッロに代表される学者語源の知識を持ち，作品の中に語源説をちりばめている．これについては20世紀後半，特に最後の四半世紀に研究が大きく展開されて今日に至っている．

文学的語源は学者語源を援用するのみでなく，作品内部で語源に基づくことば遊びを出現させることもある．Cairns(1996) は Maltby の提唱した語源指標 etymological marker をより広くとらえたが，これは読者に作品の中で語源への言及があることに気付かせる手段である．語源指標には言語的指標として次のようなものが挙げられている．

a.1 nomen「名前」
a.2 vere「真に」とその類語
a.3 primus「初めの」
a.4 antiquus「昔の」; priscus「太古の」
a.5 rusticus「田舎の」，rus「田舎」，agricola「農夫」，agrestis「畑の」
b.1 連続する詩行またはいくつかの行に隔てられている行の間
b.2 詩行の冒頭と最終語
b.3 カップリング（語源関係を想定させる2つの語が隣あっている
(Cairns, op.cit. p.31, p.33)

ここで a.1-a.3 は語彙的指標で，b.1-b3 は位置的指標である．語彙的指標は名前に注目させたり，真実性や古い過去に関連したもので，または過去の言葉づかいが残っているとされる田舎を示唆する語彙である．位置的指標は特にコメントを要しない．

指標が皆無の場合読者は語源関係を認知することができず，文学的効果が得られないという危険がある．しかしさまざまな指標はその介入が語源関係の存在を保証するわけでもない．例えば nomen「名前」という語は場合によっては語源関係を示唆するが，まったく無関係な文脈で語の意味機能を果たしているだけの可能性もある．語源関係を察知するには指標に基

づいて語源的知識を活性化する必要があることになり，このために言語に関する知識を前提とするとされる.

以下では既に言及した lucus「聖なる森」に lucere「光る，輝く」を語源として想定する対義による語源説の文学的使用に話を限定しよう.

Shelton(2011：160) はウェルギリウスのアエネーイスの次の部分を取り上げて lucus「聖なる森」の語源を論じている.

> 町の中央に森があり，木影に満ちていた.
> その場所は波と渦に翻弄されたカルタゴ人たちが
> 土を掘って，女王神ユーノーが示した徴,
> それは荒れ馬の頭だったが，その徴を見出した所,
> カルタゴ人たちが長いこと戦いに秀で食料に困ることのない民であろうことの[21]
>
> (Vergil, Aeneid 1. 441-445)

ここは主人公アエネーアースがカルタゴにたどり着いて街を探索する場面である．街の中央に聖なる森があり, この森 lucus はたくさんの影 ombra に恵まれている．この森はカルタゴ人たちが自分たちの繁栄を預言する馬の頭を見出した場所であり，アエネーアースは母親のヴィーナスに導かれて，この森の中にある女領主ディードーにより女神ユーノーに捧げられた豪華な神殿に入っていく.

語源指標としては上記 b.2 にあるように 441 行目が Lucus と umbra「影」により包み込まれていて，ここに「暗い森」と「影」という関係概念が配置されていることになる.

ところで lucus（語 A）の語源をその対立概念を含む lucere「光る, 輝く」（語 B）に求める説は，例えばイシドールスが次のように記している.

> 「（聖なる）森」」lucus は木が密生していて地上に光が届かない場所で,
> 「光らない」non luceat ことから対義法 antiphrasis により名づけられた.

もしくは森の暗さのために火をつけた松明や蠟燭が「光った」lucebant ことから[22]

この語源説は広く伝わっていたものだが，読者はこの知識があって初めて位置的語源指標を手掛かりとして語源の存在を感知することになる．

ウェルギリウスの引用したくだりについて Shelton は次のように説明する．すなわち，「森」と「影」を「明るさ」と対義の概念を喚起する語と捉える．これを（1）「「森」は「明るさ」の否定を含意する」，（2）「「影」は「明るさ」の否定を含意する」という表現で記す．「影」が「明るさ」の否定，つまり「暗さ」を含意することは問題ないだろう．他方ローマ人は（3）「明るさ」の否定から lucere「光る」を頭に浮かべるだろう．この心理的動きは（4）lucus と lucere が音韻の観点から類音を持つこと，ここでは luc- の部分が共通していることに支えられている．こうして詩には現れなかった語形 lucere が「森」と「影」の反意を持ち，「森」と語形が類似する語として意識の中に浮かんで来た．そして（5）語形の類似から lucere を lucus の語源と解釈する．

学者語源説に支えられて文学的語源が浮び上がる例だが，様々な知識を前提とするより複雑な例も少なくない[23]．

最後に対義の2つの意味を結びつける語源説の解釈について述べておこう．Cadiot(2003) は一つの語が対立する2つの語義を持つ現象にいくつかのタイプがあることを指摘している．例えばラテン語 altus は「高い」と「深い」の両方を語義として持つが，つとに Benveniste が述べているように，観察者を基準とするのではなく例えば井戸の底を基準とすれば，井戸の深さと山の高さを同じ語で表現することに矛盾はない．しかし lucus の場合，lucere を語源として想定するためには2つの語の語義が直接に対立することが必要で，「森」と「光る」との間の対立はごく間接的なものでしかない．「森」の「暗い」という性質を活性化し，それが「光る」と対立することを示して初めて意味から語源関係を打ち立てる可能性が出てくる．問題は「暗い」と「光る」の対立関係ではなく，むしろ「森」と「暗い」の関

係の活性化にある．文学的語源はこのような活性化をテクストを通して実現すると考えられる．O'Hara(1996) は詩人たちの語源説が語源の諸要素についてのことば遊びであり，その点で彼らが神話を弄ぶのと類似していると説き，同時に彼らにとってことば遊びの対象としての語源説はそれが正しいか否かは問題ではなかったと言い切っている．膨大な知識を背景としながらも真実の追及に無関心である文学的語源はいわゆる「民間語源」と同様に語源学として認める必要はないと思われる．

4. 終わりに

本稿では「民間語源」,「学者語源学」と「文学的語源学」, そして「科学的語源学」の区別を出発点とし，まずワッロなどを通して学者語源学を概観し, 次いでそれに対してどのような疑問が提出されたのかをキケロや De dialectica を通して見た．それらに対して文学的語源の機能の仕方は「民間語源」と異なり多くの知識を必要とし，しばしば学者語源を背景に持つにもかかわらず「民間語源」と同様に学問としてではなく，むしろことば遊びの側面が強く機能することを確認した．

川口 (2012) 以来「民間語源」と「学者語源」について考察を重ねてきたが,「科学的語源学」のステータスについては別の機会に考えたい．

注

1　本稿は2012年12月7日慶應義塾大学三田キャンパスで行われた藝文学会シンポジウムでの発表の一部を基に新たに書いたものである．このシンポジウムではギリシャ語・ギリシャ文学専門の西村太良氏，英文学科で中世文学専門の松田隆美氏がお話しくださり，また独文学科で中世専門の香田芳樹氏が司会をして下さった．諸先生方および藝文学会関係者各位にこの場を借りてお礼を申し上げたい．

2　ワッロの方法論については Pfaffel(1981) が詳しい．また語源論へのワッロのストア学派的アプローチについては Amsler(1988) 及び Pfaffel 参照．

3　Narro, cum alterum facio narum (*LL*, VI.51).「知らされた，知っている」narus は語頭の gn- が n- に変化した形だが，ワッロに言及はない．Cf.

Leumann(1977) I, p.188.

4　語 A に1つしかない -r- が語 B では2つになっているが，これはラテン語で二重子音が紀元前2世紀に子音を2つ重ねて表記するようになったことをワッロが知らなかったために -r- > -rr- という変化を想定したのであろう．次の例で述べる tera > terra でも同様.

5　Terra dicta ab eo, ut Aelius scribit, quod teritur. Itaque tera in augurum libris scripta cum R uno. (*LL*, V.21).

6　科学的語源学ではアスタリスクを付けて「*C」と表記するケースで, 文献的裏付けがないことは再構成 reconstruction の妨げにはならない.

7　語 A がテクスト上で確認された語 B，語 D，語 E…などから再構築 reconstruct されることは歴史言語学の日常的手法である.

8　川口 (2011) およびそこに挙げた文献参照.

9　Ovis molle pecus lanis, corpore inerme, animo placidum, ab oblatione dictum; eo quod apud veteres [in] initio non tauri, sed oves in sacrificio mactarentur. (*Etymologiae*, XII, 9.)．なおここで oblatione の b は v と発音上は一致が見られたと思われる．Cf. Maltby(1999) 参照.

10　Cuius cognitio saepe usum necessarium habet in interpretatione sua. Nam dum videris unde ortum est nomen, citius vim eius intellegis. (op.cit., I, 29.2).

11　プラトンの『クラテュロス』以来の伝統を参照のこと.

12　同書 II. xxiv.63 以降でここで語源説が扱われる神々についての言い伝えが述べられている．Caelus はギリシャ神話の天空神ウラノス Ouranos で後述するサトゥルヌスの父親で，息子に去勢される．なお Caelus は中性名詞 caelum「天空」の神格化による男性名詞で，ロマンス語の cielo, ciel などの語源.

13　サトゥルヌス Saturnus はギリシャ神話のクロノス Khronos に当たり, 時を司る神格なので，年を食べてしまうので,「年に満ちた」となる.

14　Iam vero quid vos illa delectat explicatio fabularum et enodatio nominum? exsectum a filio Caelum, vinctum itidem a filio Saturnum, haec et alia generis eiusdem ita defenditis, ut ii qui ista finxerunt non modo non insani sed etiam fuisse sapientes videantur. In enodandis autem nominibus quod miserandum sit laboratis: “Saturnus quia se saturat annis, Mavors quia magna vertit, Minerva quia minuit aut quia minatur, Venus quia venit ad omnia, Ceres a gerendo”. quam periculosa consuetudo. in multis enim nominibus haerebitis: quid Veiovi facies quid Volcano? quamquam, quoniam Neptunum a nando appellatum putas, nullum erit nomen quod non possis una littera explicare unde ductum sit; in quo quidem magis tu mihi natare visus es quam ipse

Neptunus. (*De natura deorum*, III.xxiv).

15 著者が聖アウグスティヌス sanctus Augustinus (354-430) かどうかという論争があるが，ここではこの問題には立ち入らず，テクストの内容のみを取り上げる

16 De origine verbi quaeritur, cum quaeritur unde ita dicatur, res mea sententia nimis curiosa et minus necessaria.

17 著者は -bum について例を挙げるが，以下 Vergilius の例を引いておこう．「（牝牛を求めて戦いあう牡牛たちの体は黒い血に染まり，まっすぐに立った執拗な角は大きな唸りとともに相手にぶつけられる．）森とオリュンポスの山々はその音を響き渡らせる」re*bo*ant silvae」(*Georgica*, 3, 221-223)．ここで re-*bo*are が語根 -bo を持つが，著者は「「言葉」verbum は「真実を響かせる」verum boando つまり「真実を音で知らせる」ということであるが，そういうことならば言葉 verbum は嘘を言うことを禁じていることになる」」と皮肉っている．また Lucretius は De natura rerum の第4巻で人類における言葉の発生を語る部分で，音と音声の原子としての物理的性質を説いている．そして「ラッパの低く深い音と，召喚された野蛮な地方で響き渡るブンブンとしわがれた音 reboat raucum bumbum と，ヘリコーンの山の曲がりくねった峡谷に響く白鳥の憂いに満ちた美しい哀歌では耳を打つ原子が異なっていると言っている」と語るが，ここで reboare と bumbum が一緒に用いられている．

18 この語は「縮小する」minuare の過去分詞から出た「微小な」と言う意味の形容詞なので，「小さくされたことがなくても」という表現が現れている．Cf. 英語 *minute*「微小，微細な」.

19 これは対義による説明とは異なる説明を求めた場合の話で，条約の締結の際豚が生贄として捧げられるところから慣習が言葉を規定する例と捉えられる．

20 Vergilius は Aeneis, 5, 755 で「アエネーアースは鋤で町の輪郭を示し」Aeneas urbem designat aratro と歌うが，このように土地の周辺を印すことで町を造ることを指す．

21 Lucus in urbe fuit media, laetissimus umbra / quo primum iactati undis et turbine Poeni / effodere loco signum, quasi regia Iuno / monstrarat, caput acris equi; sic nam fore bello / egregiam et facilem uictu per saecula gentem.

22 Lucus est densitas arborum solo lucem detrahens, tropo antiphrasi, eo quod non luceat; sive a luce, quod in eo lucebant funalia vel cerei propter nemorum tenebras (*Etymologia*, XVII,6,7)

23 Shelton(2011) の他，O'Hara(1996), Cairns(1996), Keith(2001), Michalopoulos(2001), Hinds(2006) など参照.

【文献】

ラテン語文献は基本的に The Loeb Classical Library のテクストを用いる.

Amsler, M. (1988) *Etymology and Grammatical Discourse in Late Antiquity and the Early Middle Ages*, Amsterdam, Benjamins.

Cadiot, P. (2003) “Sur le “sens opposé” des mots”, *Langages* 150.

Cairns, F. (1996) “Ancient ‘etymology’ and Tibullus : On the classification of ‘etymologies’ and on ‘etymological markers’”, *PCPS* 42.

Hinds, S. (2006) “Venus, Varro and the vates : toward the limits of etymologizing interpretation", Dictynna 3.

Keith, A. (2001) “Etmological Wordplay in Ovid’s ‘Pyramus and Thisbe’ (Met. 4.55-166)”, *The Classical Quarterly* 51, 1 .

Leumann, M. (1977) *Lateinische Laut- und Formenlehre*, München, C. H. Beck’sche Verlagsbuchhandlung.

Michalopoulos, A. (2001) *Ancient Etymologies in Ovid’s Metamorphoses: a Commented Lexicon*, Leeds, Francis Cairns.

Maltby, R. (1991) A Lexicon of Ancient Latin Etymologies, Cambridge, Francis Cairns.

Maltby, R. (1999) “Late Latin and Etymologising in Isidore of Seville”, in R. Kettemann, et H. Petersmann (eds), *Latin vulgaire-latin tardif V : actes du Ve Colloque international sur le latin vulgaire et tardif*, Heidelberg, 1999, Heidelberg, C. Winter:

O’Hara, J. (1996) *True Names. Vergil and the Alexandrian Tradition of Etymological Wordplay*, Ann Arbor, University of Michigan Press.

Pfaffel, W. (1981) *Quartus gradus etymologiae. Untersuchungen zur Etymologie Varros in „De lingua Latina“*, Königstein /Ts, Verlag Anton Heim.

Shelton, C. (2011) *Semantics and the Structure of Latin Etymological Wordplay*, Dissertation, University of Washington.

川口順二 (2011)「固有名詞をめぐって」, 『藝文研究』101.

川口順二 (2012)「「民間語源」と「学者語源」と「ことば遊び」」, 『藝文研究』102.